

下野國誌十之卷

芳賀百姓越智直守弘識



古城盛衰



那須郡武茂庄馬頭村小あて宇都宮常陸公泰宗始て築く正應
水仁の詳開あり

宇都宮景綱三男

○泰宗

常陸公從五位下五郎左衛門尉母秋田城公藤原義景女初名盛宗法名
蓮阿領武茂庄十餘郷

時景

美濃守從五位下法名蓮意母大宮兵部丞平胤景女

景泰

遠江守從五位下母同上為京都守護住鳥丸

宗泰

三河守伊豫國住人

朝宗

三河守大洲城主空都宮
遠江守豐綱之祖

綱景

遠江守領都賀郡西方
十餘鄉西方氏之祖

綱泰

太郎左衛門尉實宗泰
二男

泰藤

左近將監法名蓮常母

忠泰

大久保五郎左衛門尉領武茂
庄大久保郷三河國大久保氏祖

師泰

高尾明神社務母北条某
女

泰朝

三川安藝守上三川家督母同泰藤

氏泰

武茂右兵衛尉始領同郡狩野郷子狩野將監後武茂家督母同上

泰景

大山田左京亮領同郡天
山田郷母同上

氏朝

大山田美濃守母同姓三河
守宗泰女

綱定

八郎母上三川出羽守綱業
女後守都宮等綱道真州卒

綱胤

彈正少初名綱泰

綱親

上三川越中守上三川家督母同上

綱家

武茂右兵衛尉母守都宮基綱養女實常陸大掾平氏基女

泰長

四郎左衛門尉領常陸
國鳥子郷

泰宗

鳥子四郎鳥子狩野寺之祖

女子

上三川出羽守綱業室綱
俊母

此頃、西方太郎左衛門綱吉、芳賀郡赤羽小居住して、同所の上原二子塚と祖母を井領の菅谷村と地替せし時の證文あり、西方長督記と云ゆ、元龜元年庚午二月、相摸の北条氏直、西方の城を責り、刻太郎左衛門綱吉の旗下、山田修理亮澄兼、三沢右馬助、廣重、越路若狹純一、同伊勢正信、阿久津大膳義雄、渡邊源左衛門道友、青木加賀利國、和賀井河内宗義、和久井太郎右衛門長忠、越路甚五兵衛同采女、渡邊將監、石川大學、中新井兵部、中島將監、藤平大學、山田藤右衛門、阿久津久左衛門、上田吉左衛門、若林彦右衛門、川島善九郎等、防戦あり、大山田鳥子狩野寺も、永祿天正の頃、其後、更し聞え、美濃將監泰藤五代の後孫大久保左衛門五郎忠茂、三河國小住して、松平和泉守長親君小従ひ、永正三年丙寅八月、今川氏親の將北条長氏と戦て、武功を顯し、三河記小、其家門の繁榮、世の知る所あり、武茂の嫡流、持綱、宇都宮の家督を續ぎ、其曾孫正綱の三男、兼綱、再び武茂の家名を相續せて、

重興武茂系圖

宇都宮正綱三男

○兼綱

武茂右兵衛尉弥五郎母、佐竹掃部助源義親女

守綱

左衛門尉母長倉遠江守源義尚女

豐綱

右衛門尉母松野大膳亮藤原綱喬女

方綱

弥五郎

弥五郎方綱、元來佐竹家、屬して、今猶武茂弥五郎と号し、子孫連綿し、那須軍記、永祿十年丁卯二月十七日、佐竹義宣の下知し、武茂左衛門尉守綱、大山田禪正少弼、綱胤、鳥子狩野、泰宗等、那須資胤を攻り、武茂比長臣、北条豊後守義興を、大桶安藝守、螺良織部正、飯塚伊賀守、星豊前守、薄井備中守、大金藤右衛門尉、露久保清左衛門尉、小川内膳正等、武名を顯し、

芳賀城

芳賀郡真岡よあり、芳賀次郎大夫高親よりめく築く、文治年中、小
て、五行川の東岸より、と、大正五年真岡の臺に移り、

芳賀系圖

一品舍人親王九代後裔
瀧口藏人清原高澄七代嫡孫

○高親

芳賀次郎大夫建久九年
八月三日卒一本作朝重

高禎

芳賀太郎承元元年丁卯
六月六日卒

高行

小太郎天福元年癸巳
十月九日卒

高明

大炊助曆仁元年戊戌三月
十七日卒

高俊

左兵衛尉永仁六年戊戌九月十三日卒、八法名雄山宗泰号養徳院

重廣

大膳亮仕那須頼資

重行

芳賀左衛門住那須郡
兼沢郷後孫在奥州

高直

伊賀守正安二年庚子三月廿二日卒法名英心道鉄号生天院

高房

肥後守四郎領同郡八木岡

高政

八木岡四郎實少栗孫次郎左衛
門尉重宗次男

高真

三河守五郎領同郡小宅、
小宅并八幡社司東宮氏祖

高置

小宅藏人觀應三年甲子二月廿日
於駿州陸垂山討死

高久

左兵衛尉實守都宮景綱二男建武元年甲戌卒法名智山道惠号花明院

高名

從五位下左兵衛尉入道禪可越後守護職應安五年壬子十月晦日卒法名
号松林院直山禪可八十二

富高

岡本信濃守觀應三年於
駿州陸垂山討死

正高

信濃守貞治二年八月廿六日於武
藏野討死

高貞

從五位下伊賀守彈正少弼兵庫助初名公貞實守都宮貞綱長男歌人
法名号本性院徹山道覺一本作貞高非也

新和歌集秋 清原高直

高家 駿河守實高名長子 同郡飛山城主

高朝 伊賀守八郎法名普天 道照 武茂美濃守時景室泰藤及上三川泰朝大山田泰景守之母

高朝 成高 右兵衛尉入道光阿法名純 叟道清

正綱 守都宮明綱家督稱下野 興綱 芳賀孫四郎後守都宮家督 稱下野守

高益 左兵衛尉法名忠翁道賢 景高 左兵衛尉初名益親法名華 陰道春 袋方式部少輔法名永存 住越後國袋六歲

高義 修理大夫永祿九年十二月 為佐竹義重討死法名淨安 朝高 厚木美濃守屬止家氏政住 厚木法名芳樹院觀山淨光

建高 刑部大輔右馬允初名高孝 芳賀惣領法名建好宗徹 高經 右兵衛尉初名高勝天文八巳亥 八月生害法名天質道高

貞清 真岡土佐守子郎 重季 玉生和泉守玉生雅樂助藤 原綱宗家督

高照 芳賀次郎沙弥弘治元年乙卯三月生害法名芳官道賀号高照院 那須修理大夫藤原資胤室資晴母

女子

女子 玉生美濃守藤原高宗室

建高 高經守都宮尚綱朝臣 背之滅亡 依之益子勝宗の 三男十郎宗定其遺跡を賜て芳賀高定と名乗り相續以

高定

芳賀左衛門大夫實益子勝宗男天正十六年戊子正月四日卒六十八
法名雄台院機山道鑑

高繼

伊賀守十郎實高經三男高照舍弟法名直山道正

高武

左兵衛尉十郎實宇都宮廣綱三男慶長十七年壬子十月廿日卒四
十法名天德院惠鑑道光

高成

十郎仕水戸家

東鑑、文治五年己酉八月奥州泰衡追討の条、宇都宮左衛門尉朝綱郎後紀權守波賀次郎大夫以下七人以安藤次為山案内者、面々負甲足馬密々出御館、自伊達郡藤田宿向會津之方、越于土湯、嵩鳥取、越寺、攀登于大木戸上國衡、後陣山發時、聲飛箭、此間城中大騷動、國衡以下邊將無益于構塞、失力逃亡、紀權守波

賀次郎大夫寺勲功事殊蒙御感之仰、但不及賜所領、被下旗、被御可備子孫眉目之由云々、同承久三年辛巳五月十三日、宇治川合戦の条の手負の中小波賀小太郎とて

太平記、芳賀禪可入道、同息伊賀守高貞、同二男駿河守、同姓肥後守、同岡本信濃守、同清新左衛門為直寺、往々小をて禪可入道ハ駿州薩埵山合戦の軍功、依、越後の守護職、補せられ、其後貞治二年八月、鎌倉の左馬頭基氏の謀、上杉民部少輔憲顯を以て越後の守護職、替られ、此憲顯ハ薩埵山合戦、直義入道の味方、尊氏將軍の第一の敵、成、不忠不義の者、基氏を育、舊好ある故、然、禪可入道大に憤り、降、參、不義の憲顯、為、小忠賞恩、補の國を召放、様、上杉と越後、數月合戦、禪可終、打負、守護職を奪、の、一族、郎等數多討、其、上憲顯、鎌倉の執事、成、下、禪可、憤、子息伊賀守、次男駿河守、甥岡本信濃守等を遣、武藏野、合戦、不及、基氏の大軍に駈、岡本、討死、芳賀兄弟、散々、小敗、止と記

去、次、家、下、法、蘭

之、事、孫、古、己、下

一、族、不、悔、子、在

抽、名、効、衆、感、入、

具、品、即、見、但、手、也

勢加家花押

刑部大輔

高定

左兵衛尉

高純

左衛門大夫

高定

伊賀守

高純

本、心、心、催、徳、也

共、百、加、員、百、員

一、心、心、二、年

美、玉、月、廿、一、日

中山式部

中山式部信直并治真人の姓、武藏國の丹波、宇都宮家、二仕、功、河、内郡野沢村、美玉都賀郡、下石橋村、今あり

下石橋里長中山松兵衛所藏

櫻雲記よ、正平十八年（北京貞治三年）八月廿六日、基氏武州岩殿山より、芳賀伊賀守高貞と合戦、芳賀敗軍、基氏は是を追て野州天王宿に至り、宇都宮和を乞、是より於て基氏歸陣とあり、とに天王宿とあり、今の小山宿多ぶ、舊より牛頭天王の社あり、然呼し、其頃小山の城を、祇園の城と唱へり、と上各、南朝紀傳よ、とあり。

高澄二本よ
吉澄一作也

宇都宮興廢記よ、芳賀家八人皇第四十代天武天皇の皇子、一品舎人親王九代の後裔、瀧口藏人清原高澄の男、高重、花山法皇の勅勘を蒙り、下野小配流せられ、芳賀郡大内、庄に住して、七世の孫次郎大夫高親が時、小宇都宮宗綱の旗下と成を、後より五世の孫、左兵衛尉高名入道禪可が時、小至と、越後の守護職、小補せられ、宇都宮氏綱の後見と成て、近國小威を振ひ、さうが、鎌倉の管領基氏の計らひ、と、越後の守護職を召放され、武藏野より合戦、と、敗軍して、遠小改易せられ、けり、其後左兵衛尉成高が時、嫡男太郎九宇都宮の外孫と、さう依り、前下野守明綱の家督を續ぎ、正綱と号し、下野守小住、二男次郎三郎を以て、芳賀伊賀守高益と名乗らせ、同根の因あり、依て、兩家とも小繁昌し、京都將軍の御内書を拜受し、關東小於て、歷代

規模ある家筋、と、當時五千貫文の分限あり、と、記し、同書よ、正綱の三男興綱、芳賀弥四郎と号し、芳賀の城小在、と、結城政朝と謀て、芳賀宇都宮忠綱を退け、押て、宇都宮の城主と成り、下野守に任じ、然るに一族芳賀刑部大輔高孝、同息右兵衛尉高経、并小壬生中務少輔綱雄等、忠綱無二の忠臣なり、興綱を深く悪く、て、叛き、さうが、猶興綱の嫡男尚綱の時、至り、逆意を企く、さう故、小高経、同郡飛山小在り、さうを生捕て、天文八年己亥八月、誅し、子息次郎高照、剃髮し、興州白川に退き、十年を経、天文十八年己酉九月廿七日、那須高資を語らひ、塩谷郡五月女坂より合戦し、尚綱を討取り、壬生綱雄と意を合せ、相摸の北条氏康小内通し、宇都宮の城を乗取し、さう、其以前、芳賀の城ハ、益子勝宗の三男十郎高定相續し、て在り、さう、尚綱討死の後、幼主称三郎と、芳賀小引取り、守り、育て、其後那須が家臣千本十郎資俊を語らひ、天文廿年辛亥正月廿二日の夜、那須高資を討し、せ、と、弘治元年乙卯三月、芳賀次郎高照を、芳賀の城に、今の真岡つ、寄せ、腹切らせ、常陸の佐竹義昭を頼り、壬生綱雄を追伐し、弘治三年丁巳十二月廿三日、幼主称三郎を宇都宮の本城小歸し、へ、廣綱と名乗らせ、下野守に受領せしめ、

武家風状記
不備前の家
朝臣の家
芳賀内藏元
の末小記

佐竹の息女を姫て、高定、身退き、芳賀の家督、故高経の三男三郎
高継を以て相續させ、伊賀守と名のをも、その實子六郎信高を同郡
小貫郷とて少地をあたふ、小貫六郎と名のをも、その實子六郎信高の事
の益子系圖の末に記し、これの考合は、伊賀守高継の事
子なきに依り、宇都宮廣綱の三男十郎高武を以て家督とす、其身は
同郡飛山の城に引移り、云々とあり、真岡般若寺記録に、當城、天正
五年丁丑、芳賀伊賀守高継の時、築く古城、御前と云所なりとあり、
高武、宇都宮國綱の連枝とて依り、威勢を振ひ、慶長二年、合見
國綱の養子の事、小付て内乱を引起し、豊臣殿下の命、不背き、故に
一族郎後、残る、關所と成り、真岡の西郷と云所、小潜居して、慶長十
七年壬子十月廿日、四十一歳とて終り、其子息十郎
高成、後年、水戸家へ召出され、芳賀左兵衛と名乗り、子孫連綿
なり、又御直參、芳賀市三郎と云人あり、奥州仙臺、出羽の羽黒
をとり、芳賀氏ありて、本國下野と云傳へり、又白川の駅長あり、
白川古事考、小結城義永の旗下、芳賀越後守、同備中守あり、
常陸記、譚小那珂郡大子の城主、芳賀河内守とあり、

小宅三河守高真、後孫、代々同郡小宅郷に住り、慶長二年、
族没収の後、藏人高良が男、清左衛門高豊、民間に下り、真岡の西郷と
云所、ちや、東郷と、真岡町あり、其一類あり、小宅郷あり、
高良の舎弟三左衛門貞高、常陸國坂戸の城代あり、後年、水戸家へ
召出され、今猶小宅三左衛門と名乗りて連綿あり、
木岡肥後守高房、後孫、代々同郡八木岡郷に在り、伊織貞家が
時、天文十四年乙巳九月、常陸國下館の城主、水谷出羽入道蟠龍、同郡
久下田郷石鳩原とて合戦して、討死し、其子伊織貞勝、後年、御直參と名
出され、今八木岡大助と号し、連綿あり、
岡本信濃守富高、後孫、宮内少輔重親、時、塩谷伯耆守孝綱の重臣と
成り、其子讚岐守正親、豊臣家へ召出され、あり、委しく、上の塩谷系譜
の末小記あり、

厚木美濃守朝高、叔父建高が叛逆を諫め、相州厚木に移住
し、北条家の被官と成り、結城晴朝、小後、芳賀郡沖村に歸
住し、其男惣右衛門某、母方の苗字を續ぎ、篠崎玄順と号し、
醫を業とし、大江戸に住り、其後孫、本氏、復して、芳賀玄順とあり、

若色掃部助清水大和守真岡土佐守等も天文天正の頃往々見え
 たり。今太田原の家士も若色小平と云ふにや。清水の後、詳ならず
 つゞく。云々清原姓、大系圖一品舎人親王の後とありて、天武天皇の
 御齋守の三代實録より、清原真人、清見原天皇の後とあり、清
 見原を中路せり、外に、され、清原と二字、小書ても、キヨミ、と唱ふべき
 例、されども、今、キヨミと唱ふる、あり、姓氏録より、清原真人、敏達
 天皇孫、百濟王後とあり、是、い、や、より、別姓、あり、誤、ひ、く、る、べ、し。

益子城

芳賀郡益子郷ふあり、紀權守正隆より、築く、康平年間、
 中、那流山の麓、あり、後、山上、小移し、つと、城跡、二所、あり、

益子系圖

贈後二位大納言紀吉佐美卿十五世
 常陸國信太郡司紀貞頼嫡孫

○正隆

益子權守紀八郎

正頼

紀權守

正重

紀權守文治五年奥州征
 伐之刺頭武功

女子

栗田左少將藤原兼仲室宇都宮宗綱母

宗重

紀權守

朝貞

紀權守

國名、一、て、權守と号せり、い、ろ、得、び、され、其、頃、木曾の中三權守兼遠、
 たり、九郎判官の郎寺、小、權守兼房、あり、猥、も、号せり、の、か、へ、

貞重

越後守

貞正

出雲守後五位下永和三年巳月
音卒六十七法名法雲院春山芳樹

勝直

出雲守入道市黃應永三年丙子八月十五日卒六十三法名清光院月
潤凉心

女子

横田安藝守藤原泰朝室師綱母

勝貞

紀二郎正長元年戊申四月廿六日卒六十五法名法德院直心徹晴

勝秀

紀二郎實勝直男長祿三年巳卯六月廿一日卒五十八法名放光院日峯照郭

勝光

紀八郎寬正六年巳酉八月十日卒五十五法名聖光院月峯照影

勝家

兵部少輔應仁二年戊子三月朔日生害廿五法名觀理道光 紀一九 應仁三年被害于時五歲

正光

筑前守入道睡虎初紀權守享祿二年癸酉十月廿七日卒九十法名正光院
徹參了無依兄勝家懦弱害之而為家督云

勝久

行正

紀六郎屬那須家

賢仁

大羽山地藏院住持

一本正光を勝宗として兄勝家を害し其妾を奪ひ猶其子を害しと云

勝宗

信濃守入道顯虎天文七年戊戌九月廿二日卒六十九

女子

横田兵衛尉藤原綱色室綱維母

安宗

宮内少輔紀四郎天正六年戊寅正月十日卒六十八

勝忠

紀五郎領同郡七井郷

勝定

七井五郎

高定

紀十郎芳賀家督号
芳賀左衛門大夫

信高

小貫六郎領同郡小貫郷

家宗

宮内大輔實君島備中守平高胤二男天正十七年己丑三月廿日歿宇都宮家而討死于時六十一

東鑑、文治五年奥州泰衡征討の条、宇都宮朝綱の郎守紀權守波加賀次郎大夫等、西木戸太郎國衡を攻落し、拔群の勲功を顯し、頼朝卿の御感預り、右旗一流を賜り、子孫の肩目小備をさす旨仰り云々と云々、
太平記、宇都宮の紀清の両黨、戰場に向く命を棄つ事、塵效有り、尚輕くまじと楠正成し賞し、
紀氏の始祖、姓氏録、建内宿禰男紀前宿禰後也とあり、此系圖の

始り、大納言古佐美卿、公卿補任し、紀宿奈麻呂子征東將軍大納言贈後二位延暦十六年四月己未薨六十五とあり、紀氏系圖、從三位飯麻呂子古佐美とあり、日本後紀、桓武天皇延暦七年、以參議紀古佐美拜征東將軍、八年夏古佐美伐奥賊、師敗績于衣川、
宇都宮興廢記、益子家の入皇八代孝元天皇の皇孫武内宿禰十五世大納言紀古佐美卿の末葉、紀郎貞頼が時、後冷泉院の勅を蒙り、始て常陸國信太の郡司と成て下向し、其孫正隆が女を粟田少將兼仲朝臣の嫁して、宗綱をむ、宗綱、宗圓座主の猶子と成て、下野常陸兩國の守護職と成し、正隆益子の城主と成下野に移住し、長く宇都宮の旗下と成代々主家を補佐し、今紀四郎勝宗が時、至く四千貫餘の地を領し、芳賀と並く宇都宮の羽翼と呼ぶれを云々、
蟠龍軍記、享祿四年古河公方晴氏朝臣の使者として、益子信濃入道顯帛水谷兵部大輔勝吉と宇都宮小至とあり、宇都宮の旗下、
此使者のついで、同書、天正十一年益子宮内少輔家宗、宇都宮の北背、
水谷蟠龍と合体し、高塩伊勢守政平、羽石内藏助時政等を討ち、
空間左衛門尉時廣とあつて戦ひ、

宇都宮興廢記、天正十七年二月、宇都宮國綱、芳賀伊賀守、玉生美濃守等と密謀して、益子宮内少輔家宗を攻め、其所領六百町餘を没収し、ととめ、家宗が子孫に常陸に流罪して久慈郡に潜居し、と云々、今同郡大子の郷士小益子民部と云々のあり、其後孫あり、と云々、都て久慈郡の郷士小益子氏あり、と云々、水戸家の藩中あり、と云々、當國黒羽の家中にも益子某と云々あり、無住法師の雜談集にも、宇都宮紀の黨ふ、貫新左衛門尉と云、精兵あり、と云々と記し、今芳賀郡乙貫郷氷室村の里正に貫新左衛門と云々のあり、其後孫あり、と云々、其の詳あり、と云々、七井五郎小貫六郎等の後孫と民間に下りて、今其所あり、と云々、

壬生城

都賀郡壬生驛より、寛正三年壬午十月、壬生筑後守胤業と云々、築く、壬生氏住と云々、依て、當所を壬生と云、古名、上原と云、一、所あり、と云々、

壬生系圖

垂仁天皇后胤

小槻宿禰今雄苗裔壬生官務庶流

胤業

筑後守考五郎文正三年乙丑卒七十法名龜雲道鑑号常樂寺

綱重

筑後守左衛門佐大永三年癸未卒七十六法名祐益東關号大徹院

綱房

中務少輔弘治元年乙卯三月十七日卒七十七法名雲山良瑞号龍桂院

周長

号徳雪齋甥綱雄叛宇都宮仍討之後年其子為義雄生害

資長

左衛門尉弥次郎領大門宿今云上殿村

資忠

大門圖書助弥七郎

綱雄

下総守中務大輔天正四年丙子二月廿五日為叔父周長生害まら法名惠光芳折号龍昌院

昌膳

日光山坐禪院住持

義雄

上総中務大輔初名氏勝天正十八年庚寅七月八日病死于時相州酒匂川在陣法名雄山文英号寒光院

女子

皆川山城守藤原廣照室隆廣母称鶴子

女子

称伊勢亀二色左衛門源滿義室

宇都宮興廢記云壬生原治の兩城主壬生上総介義雄下総守綱雄の子として初名彦五郎氏勝と云其先祖崇神天皇の皇子豊城入彦命にて後裔壬生部公より出高祖筑後守胤業當國下向宇都宮正綱之後て壬生の城を築き是に住其子筑後入道東關が時小至る

領人凡南、都賀郡大宮村西、安藝郡足尾山北、
一、所務一、一、方貫餘の不限、宇都宮の旗下、
一、第一の長臣、然、近年芳賀左兵衛尉高武、
依、我意を振ひ諸臣を蔑ぶと憎、天正十三年北条氏直
小内通一、密、皆川山城守廣照とも、北条の旗下、
先祖を壬生部公より出ると云、非、
生官務の庶流、
垂仁天皇の皇子於知別命の後也とあり、
務の事、職原抄、小史八人、左右大史各二人、
中事謂之官務多五位也、其餘彼一族及門徒等、
者大政官文書悉知之、樞要之重職也、
鹿沼の山口安良が云、壬生系譜一本、
代筑後守意安四代下総守綱房五代上総介義雄と記、
房、宇都宮廣綱、
於て、舍弟德雪齋討、後年德雪齋討、
とあり、誤、
德雪齋討、綱房の子綱雄、
綱房の子義雄、
綱房の子義雄、
綱房の子義雄、

て鹿沼の今宮権現の棟札、天文三年綱房新造とありて、二男坐禪院
 昌膳十七と記し、その子綱雄、其兄を以て廿歳許も成ぬ、其父綱房
 四十歳餘りなり、徳雪齋が綱房を討つとあり、天文四年七月、四
 十三年を経り、然るに綱房八十餘りあり、綱雄、此時六十餘りあり、
 是を以て考まじ、徳雪齋討れ、綱雄を以て其子義雄より徳雪齋を討
 て仇を報し、（中略）と云て安良の考へ、初祖を筑後守
 某と、代胤業三代意安と記し、（中略）を校訂せざる、いふ、初代胤業を
 其子の綱重、其子の綱房なり、其明證、宗長が東路の裏小
 我久しく、該河の園小あり、小白川の関あり、（中略）霧ととも思ひ
 つらん、（中略）春を過し、（中略）の秋をば、（中略）永正六年文月十二日と
 き、（中略）思ひ、（中略）中畧、壬生と云所、行横手刑部少輔繁世と
 相伴あり、連歌あり、小児の執筆を致せり
 木末の（中略）此あり、この眺望より、（中略）少捕綱房、（中略）折しも、秋なり、（中略）

巻六

あきもやまにやまの夕るり

夕への煙今朝のあき霧もやとたけしえ侍るちりもめで猶ありしよ
 こそけり

東路の雲のや、はる秋れい、（中略）夕るりあり、
 入の、（中略）日光山へあり、（中略）出、（中略）一宿して、（中略）出、（中略）出、（中略）
 きのでよ

あきもやまにやまの夕るり
 入の、（中略）宇都宮と那須と、（中略）出、（中略）出、（中略）

十三日宇都宮より壬生へ、（中略）十六日依野へ入り、（中略）太平とて山寺あり、（中略）

一宿して連歌あり。

麻の音やそめいももらの筆の松

松杉のまゆのまきまきあそび

十六日総領事らよりうらぐらぐとよめられそとてまきまきあそびたふ神た
たふぐ

六十にありあけりやふれりまるとあつらふらふとてあそびたふ

徳寺長阿と同年のよりふ下畧

宗長は宗祇の門人なり近江國北村の人なり暮年駿河國に住居し

て享祿元年戊子三月十六日没し八十五歳と聞えり

東國擾乱記に壬生上総公義雄皆川山城守廣照寺天正十七年宇都宮

を背きて北条より後同十年豊臣關白小田原征伐の刻壬生皆川より小

北条陸奥守氏照より属して竹鼻口を防ぐ三月廿九日山中の城落て明

四月朔日小田原より攻寄ると聞えり氏照寺小田原の城引退く云同

四月八日の夜皆川山城守いひそふ徳川家の御陣所降参り云

上総公猶小田原より籠城して在りたるが七月八日酒匂川の陣所にて病

死にたりり今をくくの石塔は廣治の雄山寺と云ふなり

死にたりり今をくくの石塔は廣治の雄山寺と云ふなり

或本は竹鼻
口に竹鼻
あり

雄山の徳堂
の更なる寺で
至徳寺勢茶
庵より初本
近江守と大
徳寺の徳堂
あり

雄山交英夫居士記に初祖徳後守胤業の墓至徳の常樂

寺より常樂寺則胤業の法号なり義雄は至徳の常樂寺ありて伊

勢龜と稱し断絶の後二色左衛門の軍に在り是を至徳系譜に奉り綱房

の長女と記し誤なり伊勢の佐八神主が所藏の状に

徳寺を常樂寺と云ふは徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

至徳寺も常樂寺なり徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

徳寺の徳古物なり大徳寺より常樂寺なり

那須城

那須郡三輪郷より、從五位下那須權守資家より、めく築く天治二年乙巳より、

那須系圖

大織冠鎌足公嫡流攝政兼家公五男

道長

攝政大政大臣号法成寺入道殿、又御堂關白母攝津守中正女寛仁三年己未三月出家法名行覺万壽四年丁卯十二月四日薨六十二

長家

從二位權大納言母左大臣高明公女

道家

從五位下称大夫君母源高方女

資家

從五位下那須權守改名貞信七世之祖依惠平公之謚也、天治二年乙巳下向野國那須郡而号須藤

資通

刑部丞

資滿

太郎

資清

太郎属源家而平治合戰討死

宗資

太郎

資房

次郎那須武者所實、資清二男

資隆

太郎

光隆

森田太郎母小山大掾政光妹

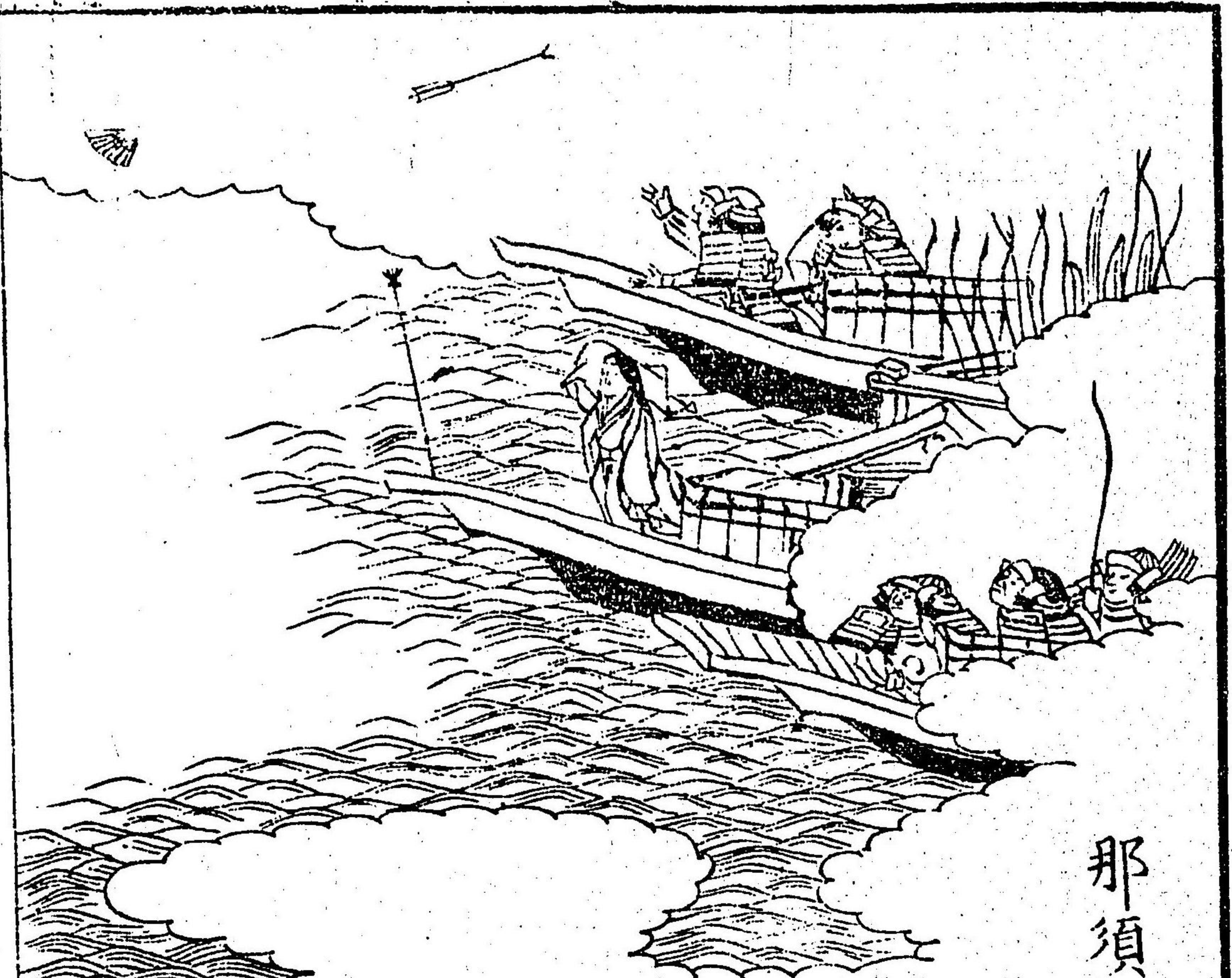
系譜云光隆以下至為隆背源氏而属平家餘一宗隆一人從源家故為惣領云

泰隆

佐久山次郎

幹隆

平淵三郎



那須宗隆射扇的之圖

其侯所藏之屏風

縮圖於狩野守信畫

宗隆之花押



久隆 之隆 實隆 滿隆 義隆 朝隆 為隆 宗隆

福原四郎

那須五郎後改資之而本家相續

瀧田六郎

澤村七郎

堅貝郎後移在與野鄉号與野八郎

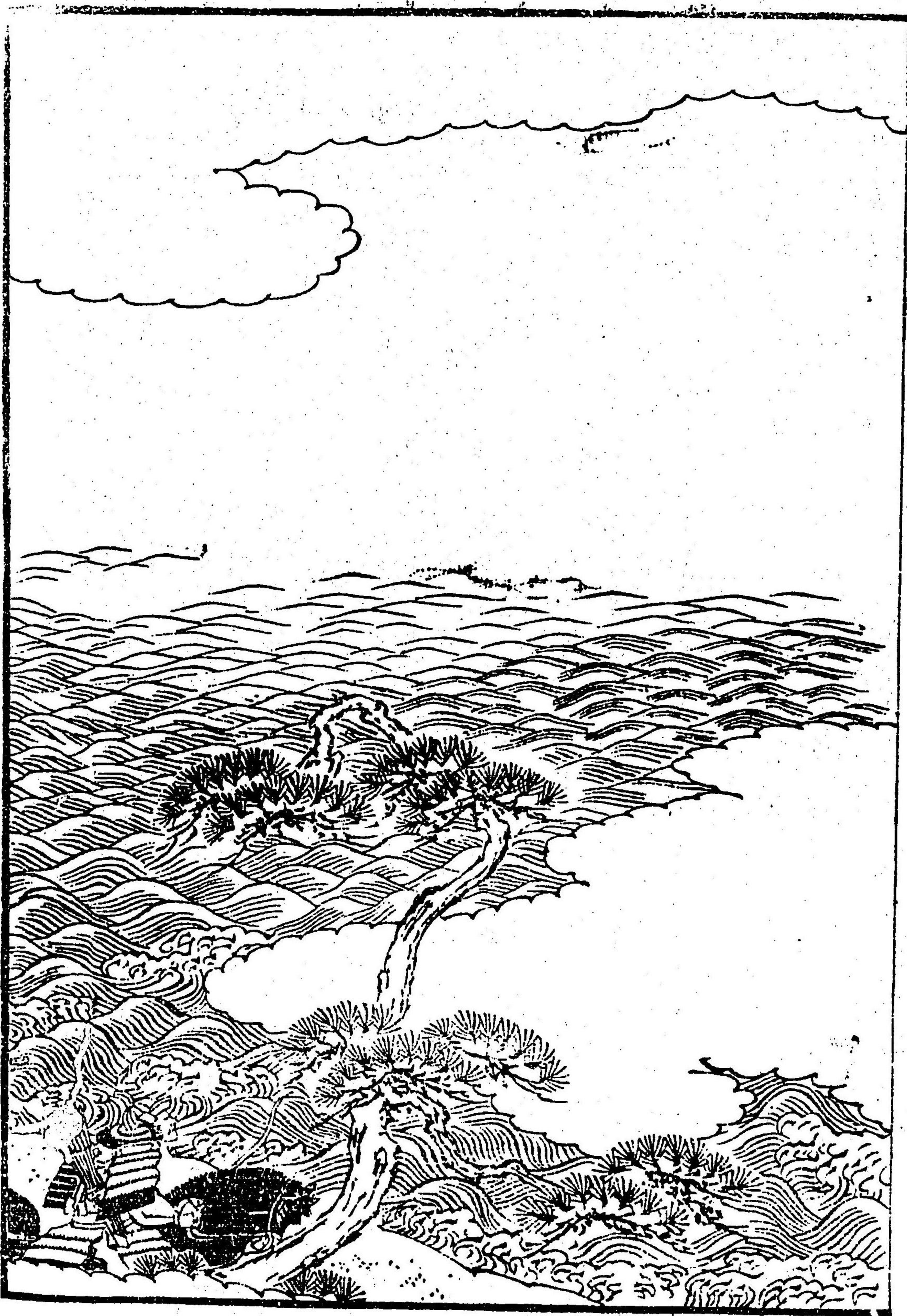
梶田九郎

戶福十郎後移在千本郷号千本十郎

餘一郎相續父之家名而改資隆

資廣

小太郎實之隆男一本作周防守



平家物語小宗隆扇の
的を射る条、兜いぬきて
とあり軍の場、はらりて
的矢射ふ、兜いぬきて
こと云もきりあり、是れ
狩野守信の繪なりと云
なりんうし



系譜云、人皇八十八代高倉院御時治承四年源賴朝卿蒙平家追討院宣以舍弟範賴義經等為名代相權諸國源氏引率數万軍勢入洛之刻宗隆屬義經於所々合戰就中於讚州八島應嚴命而射扇的譽振天下名輝万代為其感賞於丹波信濃若狹備中武藏五箇國賜莊園為那須物領其後為薙髮上洛於伏見即成院遂往生素懷嫡子依幼少舍兄資之續家督以賴資為猶子賴資崇亡父靈建立祠於那須莊号御靈宮云々

平家物語云、源平盛衰記等よきそく世の知る所なればさしにともども御靈の宮ハ今那須郡恩田村あり馬山城下より北の方にて三里餘あり

資之

那須五郎初名之隆實、宗隆兄

賴資

肥前守余實宗隆男從賴朝卿賜諱一字母守都宮朝細女

光資

肥前守太郎又余一

東鑑小建久四年三月九日丙子那須太郎光助拜領下野國北条内一村是來月於那須野可有御野遊之聞為其經營被免代之云々
四月二日戊戌覽那須野去夜半更以後入勢子小山左衛門尉朝政守都宮左衛門尉朝綱八田右衛門尉知家各依召獻千人勢子云々那須太郎光助奉獻餉云々光助則光資なり同嘉禎三年の条小那須肥前前司とあり光資あり建長八年の条小那須肥前前司とあり福原小太郎芦野地頭とあり

資永

青土野次郎左衛門尉

朝資

荏原三郎

廣資

味岡四郎

資家

稻澤五郎

資成 河田六郎

資家 五郎實賴資五男兄光資
無嗣子故家督
資忠 加賀權守

資藤 備前守五郎文和四年乙未三月十三日於東寺合戰討死

資方 芦野日向守芦野家相續

太平記云那須加賀權守より那須五郎等より討り且之資貞忠と資藤との父子あり資藤は足利尊氏將軍小從て東寺の合戦に武功をありて討死せり

資世 越後守法名西雲
資氏 刑部大輔余一

資之 美濃守余一
氏資 遠江守大膳大夫母上杉氏
入道禪秀女

續太平記云永享十一年鎌倉持氏朝臣の乱の時上杉方より那須美濃入道同遠江守満資あり是ハ資之氏資の父子なり

明資 肥前守大膳大夫
資親 播磨守大膳大夫實氏資二男兄明資無嗣子故家督

女子 宇都宮下野守藤原明綱室生女子
芦名遠江守平盛詮室也

女子 結城彈正少弼藤原義永室顯頼及資永母

女子 小峯修理大夫藤原朝脩室無字

女子 沢村越後守藤原資持室資實母

白川結城系圖小七郎朝光五代の孫大藏少輔親朝の長男結城大膳大夫顯朝九代の孫彈正少弼政朝是利義尹將軍の諱の一字を賜はり義永と改む親朝の二男小峯三河守朝常七代の後孫八修理大夫朝脩をて朝脩ハ永正七年二月七日自害とあり小峯と白川の城地の名あり、

資 永

那須太郎實結城彈正少弼藤原義永二男母那須遠江守氏資女
永正十三年丙子八月三日生害于時十八歳

女 子

資永室同時自害

女 子

宇都宮下野守藤原成綱室忠綱母

女 子

沢村伊豫守藤原資實室資房母

次 久

山田次郎為資永被害于時六歳

那須記大膳大夫資親ハ女子三人ありて家督を譲るが男子あり

依り白川の結城彈正少弼義永の二男を養子とせしむる是ハ元
來資親の甥なれば然るも其後永正八年男子をまうけ山田次
郎資久と名つけ六歳小成なるころ資親ハ小太田原出雲守をう
らひ資永をうかひて實子資久ハ家督を續せんと謀る是ハ依
り出雲守大關伊王野芹野稻澤等を驅催し三百餘騎して福原の
城へ押寄たり資永ハ腹心の郎等關十郎義時密に福原の城を抜出
山田の城へ忍入り乳母を抱ふる資久を奪取て立歸りたり資永ハ歡
びく矢倉小上く資久をきり殺し死骸を寄手の中へ投出して主
從差違ひく死しり是ハ不於て那須家の正脈ハ断絶なりとあり

資 重

沢村五郎永享乱以來與兄資之依不和為上下移住鳥山于時
應永廿五年戊戌正月廿五日也

資 持

越後守五郎母佐竹右京
大夫源義俊女

資 實

伊豫守母那須大膳大夫氏資
女

資房

修理大夫右衛門大夫母那須播磨守資親女其時依本家新莊合上
下莊而為惣領

政資

壹岐守弥太郎母大關新左衛門尉平義任女

高資

武者所太郎母岩城左京大夫平常隆女天文廿年辛亥正月廿一日於
千本資俊館生害

資胤

修理大夫初号森田次郎母大田原備前守丹治晴清女兒高資拔生
害本家相續為惣領

資郡

福原彈正左衛門尉初名資安後号森田

女子

佐竹右京大夫源義重室無子

資晴

從五位下修理大夫大膳大夫法名休山母芳賀右兵衛尉清原高経女
實吉野日向守資豊女之腹云々代々所領八万餘石知行千石云々

資景

左京大夫余童名藤元
母小山彈正少弼藤原秀綱

資重

美濃守母小守野守政種女
寛永十九年卒所領一万石

那須記小永正十三年那須の正脉断絶小依く烏山の資房上下の莊を合
て惣領と成那須修理大夫と名乗ケリ云々

同十七年庚辰八月十二日白川の結城彈正少弼義永我子資永が修羅の
櫓衝を晴と岩城下總守常隆の與方をくつゝ其勢都合一千五
百餘騎と駈催し上那須の浄法寺繩つゝと云原(押寄せり)那須方へ
兼て期しつゝ事カレハ資房父子興野長門守義忠熊田源兵衛高貞大
關新左衛門義任河合出雲守安則館野越前守直義小口若狭守重勝千
本常陸公資俊荒井駿河守政藤岡太郎左衛門實一等をくつゝめ三百餘
騎と駈向(戦ひ)くつゝ敵陣より山上弥三内藤左馬助と云々の是より關
東よりくつゝなり鉄炮と云火矢を放しカレハ那須勢大に難義しんを
桂原三郎朝秀鮎ヶ瀬源三義昌の兩人移り寄て彼岩上内藤を射落

しつり其上敵將白戸淡路守、大關新左衛門を討て同志賀塚備中守、石沢新五郎と組て討死し、奥州勢も敗軍して散々小成り引退く云々

大永元年辛巳十月十四日、岩城常隆去年白戸志賀塚を討死し、其勢都合無念と思ひ、白川義永もよきり、宇都宮俊綱の加勢をよめ、其勢都合五千餘騎を以て攻来て、那須の出城河合出雲守安則が守り、河合の城を攻落して、その鳥山を向くと、河合の城を十重廿重に取圍む、其れども那須家譜代の者ども必死と成て籠城し、其れが寄手も攻あぐりて見えたる處に、宇都宮の軍師壬生徳雪齋周長が謀り、終に落城し及びたり、此時壬生が家臣稲葉七郎枝群の働いて討死し、其後那須資房と岩城常隆と和睦有て、常隆の息女を、那須弥太郎政資と嫁合て、程多く太郎高資出生し、其れが両家の無異と静てたり云々

天文十八年己酉九月廿七日、宇都宮俊綱二千餘騎を引具し、塩谷郡五月女坂に寄来り、是に依り、那須太郎高資、大關右衛門佐高増、太田原山城守綱清、芦野天和守資泰、伊王野下野守資宗、千本常

陸資俊、福原安藝守資則、金枝近江守義高、角田莊兵衛重利、興野弥四郎義國、稻澤播磨守俊吉寺三百餘騎を以て馳合せり、大軍に追立られ坂より下へ引退き、其れが成り、大將俊綱、小高き所を馬をけり、下知し、伊王野の家臣鮎瀬弥五郎實光、給り寄て俊綱を射落し、其れが宇都宮勢多く討死して散々小敗走り、其れが此合戦一本、天文十五年五月と記し、其れが非あり

同廿年辛亥正月廿二日夜、千本常陸資俊謀計を企て、那須高資を己が館小招きて討取り、是に宇都宮方より千本を語り、故ありと云、是に於て、舎弟森田資胤、那須の惣領を續ぎたり云々

永祿三年庚申三月廿六日、會津の芦名左京大夫盛氏、白川の結城三河守義親と合駱し、奥州と下野との國境小田倉に云所、押寄せり、是に依り、上那須の大關右衛門佐高増、芦野天和守資泰、伊王野下野守資宗、太田原山城守綱清、稻沢播磨守俊吉、金丸肥前守河田六郎等、馳向く戦ひ、其れが利を失て散々小敗軍に云々

同九年丙寅、大關、芦野、伊王野、太田原、稻沢、金丸等、那須資胤の不興を受、是に小田倉合戦、不覺を取、故あり、是に依り、佐竹家内通し

小田倉と云所の奥州白川の西南の方、約二里許、黒川の北岸なり

同年八月廿日、上那須衆三百餘騎、熊田小押寄せり、佐竹常陸次義重、此舉に乗じて、那須を攻落さんと、東將監政義小二千餘騎を授け、茂木次郎義政、續谷織部等を攻落し、宇都宮廣綱も佐竹の加勢として、鳥山の西神長村の治部内山小押寄て攻戦なり、

同年丁卯二月十七日、上那須衆鳥山の東より下境村の大崖山に出張し、佐竹の先陣南次郎左衛門尉義郷、戸村十大夫義廣、小場三河守義忠、長倉遠江守義尚、其外武茂九衛門尉守綱、大山田彈正少弼綱胤、鳥子狩野介泰宗、横田十郎綱久、松野讚岐守篤通、石川大和守昭光、大金備後守重宣等、其勢六千五百餘騎、之を攻来り、那須方、森田彈正左衛門資郡と大將として、大桶三河守重安、金枝近江守泰晴、熊田源兵衛高貞、岡太郎左衛門實二、高瀬大内藏親定、河合六郎安利、薄井越中守以安等、千五百餘騎、中川を渡り、必死と成て防ぎ戦ひ、十九日引退きたり、

同年四月廿日、佐竹勢五千餘騎、下境の地へ攻来り、那須方、本庄三河守盛泰が居城より出張して防戦し、其人々小久保民部少輔秋元、越前守同右京亮同豊後守金九下総守龍川泉藏坊等を以り、上那須の大関右衛門佐伊王野次郎左衛門、若野大和守稻沢五郎左衛門、福原安藝守等、四

百餘騎、鳥山の北谷に押寄せり、斯の如く、上那須衆佐竹小属して度々攻来り、資胤大に難義小及び、故與野称左衛門義重計義を廻り、資胤を諫言し、大関方へ参りて降参の義を勧めたり、依て大関を以て、上那須衆、歸伏して、以前の如く上下一勢となり、是より

大関、法幹して安碩と名乗りたり、天正元年癸酉正月、佐竹義重水戸の江戸、但馬守重通を攻落し、夫を小田讚岐入道天庵を討亡し、常陸一國を切随ひ、其勢ひに乗じて、那須を以て攻め、ひとと度々寄来り、雄雄いづるなり、又武茂左衛門尉守綱、松野讚岐守篤通等、元来、宇都宮の一族たり、年来、那須と争て合戦止期なり、

同十年壬午十一月八日、那須修理大夫資晴、密に大関入道安碩、太田原備前守晴清、福原安藝守等、命じて、千本常陸、資俊、同息十郎資政、其老臣田野邊將監重之等を、鳥山の城南なる瀧寺に欺寄て誅伐し、其苗跡を、茂木次郎義政に相續させ、千本大和守義隆と名乗せ、是、大関入道故あり、千本と不和と成り、依て、先年千本が高資を討し、由を、資晴に語り、語り、詭言なり、故ありと云、

多賀谷下総
守八政経
常陸國下妻
の城三ツツ
結城晴朝の
旗下之後
佐竹不属は
往々あり

仍舊之在古今傳記其音語殊異非能之也
且遠近及抄刻其音語所著類多
今檢其音語之由以之其音語之由
之平向其音語之由海城之事其音語
親重其音語之由其音語之由其音語
今其音語之由其音語之由其音語

行年一以在起于心之百之古因尔
已檢其音語之由其音語之由其音語
神

五月廿五日

清貞

之

多賀谷下総

那須家所藏

多賀谷下総
守八政経
常陸國下妻
の城三ツツ
結城晴朝の
旗下之後
佐竹不属は

同十一年癸未二月佐竹義重五千餘騎を率いて鳥山の川原表へ寄来り
那須方へ大關右衛門入道安碩同息土佐守増親太田原備前守晴清芦野
大和入道意休伊王野下野守資宗同息下總守資信館野越前守直重九田
友右衛門正信興野尾張守義重築瀬半兵衛宗武益子紀六郎行正薄井越中
守以安稻沢五郎佐久山四郎高瀬大内藏浄法寺中務大桶三郎河合大膳
等五百餘騎其外茂木次郎義政が勢八十騎あり喜連川の塩谷安房守
孝信が勢八十餘騎狩野百村の野武士ども五百餘人馳加はりて先途
と防ぎ戦ひくれば佐竹勢も左右あぐり攻めて引退きたり云々

同十二年甲申川崎の塩谷伯耆守義孝喜連川の塩谷安房守孝信を
攻むる安房守、元来義孝の舎弟なりとも大關安碩が娘を嫁せり
故に兄弟義孝小背きて那須に属しくればなり是より依りて宇都宮國綱
義孝の後詰として出張にあり那須資晴も安房守を援けんと出陣
しをり跡より佐竹義重襲ひ来り故に引返り依りて喜連川落城し安
房守は佐久山へ落行なり故に伯耆守が手勢喜連川の城へ入替りたり云々
同十三年乙酉三月那須資晴大關入道安碩と謀りて塩谷伯耆守義
綱が川崎の城を攻落し喜連川を取返さんと塩谷安房守孝信と

先陣として其勢三百餘騎塩谷郡薄葉が原へ發向は是を聞て山田筑後守
業辰岡本對馬守氏宗等手勢百餘騎許り馳向ひ戦ひくれば忽ち攻破れ
り兩人とも討死し宇都宮國綱も後詰として紀清兩黨二千餘騎
壬生上総公義雄が勢二百餘騎を引率いて出陣し先陣平塚弥十郎
為貞麻生弥吉郎家忠等塩谷安房守を馳破りて討死し其の宮勢
散々小敗軍し國綱も多勢の中へ取圍はれて既小危ありて後薄修理亮
保正主従十六騎取返りて討死し壬生勢踏まはりて防ぎ戦ふる云々

國綱漸く席口を退き引揚り云々
東國擾乱記に那須修理大夫資晴、天正十三年乙酉三月宇都宮國綱と
塩谷郡薄葉が原にて合戦し國綱も多勢を破り勢ひを棄りて孤川鶴
宿寺大小の城五六ヶ所攻取て近隣小威を振ひく處小同十八年庚寅三月
豊臣大關秀吉公相州小田原の北条を御征伐し御出陣在りて
東國の大小名御陣を馳集りしもの引もきり是より依りて那須が族家人
等も同く小田原へ参上して御動坐の儀を賀し奉り北条既亡
て殿下奥州を征伐せんと同八月十五日下野山下向小山御陣をとり
給ふに及で資晴より見参りて殿下資晴が邊参を怒を給ひて那須

が本領をくく彼一族家人等よりけりあふく資晴より福原の地を
を賜りて云々と記し

大関右衛門佐丹治高増

黒羽一万八千石余

福原安藝守藤原次貞孝

佐久山三千五百石

蘆野日向守藤原盛泰

芦野三千十六石

那須修理大夫藤原資晴

鳥六万石改易千石

太田原備前守丹治晴清

太田原万石改易千石

千本大和守藤原義貴

千本千五百石

伊王野下総守藤原資信

伊王野千七百石改易

以上那須七騎ト云

武徳安民記卷五下野國那須七騎、太田原備前守晴清、伊王野下総守資信、
大関左衛門佐資増、千本大和守福原安藝守、芦野民部少輔岡本下野守、
記し、此中に岡本を加へ、非ず、最其頃岡本宮内少輔義保と
云人あり、太田原福原等と共に豊臣殿下に謁し、岡本、元来宇都
宮家の被官、那須の旗下より、其頃岡本下野守と聞えり、
織田の家臣、神戶信孝朝臣の附人なり、後小石田三成同心して滅亡し
及ぶ、北畠軍記より、尾張國熱田宮の社司より出、岡本か

て、當國の岡本氏ハ、芳賀禪可入道の舎弟富高、河内郡岡本郷を領し、
岡本信濃守と号し、其後孫より清黨より混じり

大関太田原の両家ハ、繼志録より太田原備前守丹治忠清十三代同備前守資
清入道永存の長男高増ハ、大関肥後守高濤十三代弥五郎増次滅亡小
依り、其家督を相續し、大関右衛門佐と号し、後入道安碩と云、其子土佐
守増親、其子信濃守増榮、其子民部増茂、早世小依り、其子増恒家
督して信濃守と云、永存の二男ハ、太田原山城守綱清、其子備前守
晴清入道永金、其子備前守政清、其子山城守高濤とあり、其先、武藏國
丹黨より出、丹治比真人の姓なり、世々那須家の羽翼として、武功の家筋
あり、但、大関氏ハ、中平姓として常陸國小栗御厨庄大関郷より出り、
伊王野ハ、那須と一資隆の男、肥前守頼資、二男、次郎左衛門尉資永、
以来、代々伊王野に住りて、下野守資宗の男、下総守資信、其子又十郎
資重、早世に依り、二男、又次郎資朝、相續して、豊後守と云、資朝女二人
あり、長女ハ、井上新左衛門の男、數馬を尊養子として、相續し、早
世し、故改易せられ、家名の残り、残る、次女ハ、千本大和守義貴
の室とあり、又十郎資重の男、又六郎資直ハ、浪人と成て、後、太田原家の

臣下とあり、伊王野五郎左衛門と名のマ、子孫連綿して

福原ハ周防守資廣以来代々福原に住して、彈正左衛門尉資郡ハ那須資胤の弟なり、一ガ男子なきに依り、太田原晴清の二男を養子として、安藝守資孝と云、其子中務丞資廣子あり故に、弟資保を家督として、雅樂頭と云、其子資盛淡路守と云、其子資敏内記と云、

千本十郎為隆、後孫ハ常陸公資俊に至り、断絶し、其名跡ハ茂木次郎義政相續して、千本大和守義隆と名乗る、後自ら義貴と改む、其子大和守義定、其子大和守義等、早世し依り、舎弟又七郎資吉相續して、兵右衛門と云、さて、茂木次郎ハ、田右衛門尉知家の三男、茂木三郎知基が末孫なり、

下野國誌十之卷終

芦野ハ那須加賀權守資忠の三男、芦野日向守資方の後孫として、近代日向守資

豊、其子大和守資泰入道、以休、其子日向守盛泰、其子弥左衛門政泰と云、

足利 梅溪四崎明義畫
北越 竹邨遠藤順信書



特56

78

野
國
志

特56

78

野國志